

令和 7 年 6 月 12 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2024

課題番号：18K10313

研究課題名（和文）糖尿病療養指導士と患者会の協働によるセルフケアpower upプログラムの有効性

研究課題名（英文）Effectiveness of a Self-Care Power-Up Program through Collaboration between Certified Diabetes Educators and Patient Associations

研究代表者

脇 幸子（Waki, Sachiko）

大分大学・医学部・教授

研究者番号：10274747

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「仕事のために健康関連イベントに参加しにくい状況への対応としてウェブを活用した支援の拡充」と「糖尿病に限らず関心を引く楽しい健康教室などの企画」に焦点を当てた。また、地域の人々・CDE・支援団体・施設間の連携や、自治体・大学・福祉団体との協働プログラムを検討した。その中で、ACPのように、個人が自身の価値観や判断をもとに将来について考える自己決定のプロセスが、相互的な自己評価を深める手段となり得ることが示唆された。また、多様な価値観や判断をもつ人々に対応するためには、CDEが知識や感受性を継続的に高めること、そして自己管理能力を育むための対話と交流の場が必要であることも示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、ACPのように個人が自身の価値観や判断をもとに将来について考える自己決定のプロセスが、相互的な自己評価を深める手段となり得ることが示唆された。このことは、セルフケアの困難性にも対応できる手がかかりだと思える。また研究期間は、喫緊のコロナ禍の社会的課題に見舞われた。この経験は、外来や入院といった社会資源のみでは対応できず、医療の現場や人々の健康に多大な影響を与えた。セルフケアの大半は、日常生活の中で繰り広げられるものであり、病院に限らず産業や地域の多様な場や機会を設けて、対話を通して自分の健康や人生について振り返ることの重要性、および、その場や機会を設けることの難しさが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study focused on two main areas: expanding web-based support to help people who have difficulty attending health-related events due to work, and organizing engaging health classes not limited to diabetes. It also explored ways to strengthen collaboration among community members, Certified Diabetes Educators (CDEs), support groups, and facilities, while considering joint programs with local governments, universities, and welfare organizations. The findings suggest that decision-making processes such as Advance Care Planning (ACP), where individuals reflect on their future based on their own values and judgments, can help deepen mutual self-assessment. To support diverse values and perspectives, CDEs need continuous development of professional knowledge and sensitivity. The importance of providing opportunities for dialogue and interaction to enhance self-care abilities was also highlighted.

研究分野：臨床看護

キーワード：セルフケア支援 地域協働活動 ACP CDE セルフヘルプグループ

1. 研究開始当初の背景

糖尿病・予備軍のある人の治療は食事・運動・薬物療法が中心となるが、単に治療をすればよいわけではなく、その人自身のセルフケアが必要となる (Shrivastava et al., 2013)。糖尿病自己管理へのコンプライアンスを求めている時代に比べ、自律性を重んじたセルフケアが重要視されるようになり、血糖コントロールや糖尿病重症化予防への成果も報告されている (Weinger et al., 2005, Naik A.D. et al., 2009, Shrivastava et al., 2013)。

このように、糖尿病・予備軍のある人のセルフケアは重要であるにもかかわらず、その実践においては、生活調整の苦痛や合併症の不安、心理的負担などの生活上の困難性 (直成, 板垣, 渡辺, 2010) や、看護師の支援への戸惑いも報告されており、糖尿病・予備軍のある人も支援する側の看護師も様々な困難を抱えている現状 (原ら, 2011, 川又ら, 2011, 屋蔵ら, 2011) がある。また先行研究では、糖尿病をもつ人が知識を獲得するだけではセルフケアにはつながらず、厳しい自己管理は自分らしく自己管理することに負の影響が示唆された (S.Waki, et al, 2016)。

入院や外来の医療現場では、セルフケア方法や知識の指導内容が中心となりやすいが、糖尿病・予備軍のある人はセルフケアを長期に自分の生活の中で行うため、効果の実感や、自分の生活に合わせた調整が必要で、そのためには、療養生活において自分自身で、自分のセルフケア状況を自己評価できる力を育成する必要がある (S.Waki, et al, 2016)。

しかし、現在は、セルフケア方法の習得を目指した知識提供や行動変容のための教育が中心で、糖尿病・予備軍のある人がよりよく自己のセルフケア状況を評価し、次の実行へつなげるための支援にはあまり目が向けられていない。そこで、セルフケア自己評価支援はガイドラインを用いたとしても、現状の煩雑な外来診療の合間に行うには、時間とマンパワーが課題となった (脇ら, 2011, S.Waki, et al, 2016)。

一方、糖尿病をもつ人は日常生活上や健康管理上の場面で何らかの情報を得て、自分の糖尿病を持ちながらのセルフケア行動の営みに対して、何らかに (何が起きているのかに) 気づき、そのことを思考 (判断) し、その結果自分の考え方や行動に何らかの影響を受け、今後について考え、次からのセルフケア行動に向けて調整をしていると推測される。近年、慢性疾患をもつ人のアドバンス・ケア・プランニング (Advance care planning, 以下 ACP) が注目され、個人の将来の医療やケアの目標と意向について、家族や医療者と話し合い、必要に応じて記録および確認できるようにするものと定義されており (Rietjens et al., 2017)、ACP のように、患者が自らの価値観・判断に基づいて将来を考える自己決定のプロセスは、自己評価を深める営みとして応用できる可能性がある。

そのため補完的に、地域で糖尿病・予備軍のある人と密接に活動する CDE が備えている資質を活かして、セルフヘルプグループ活動や一般公開講座などの相互作用の場でセルフケア自己評価の支援ができれば、糖尿病・予備軍のある人のセルフケア促進による CDE による地域における糖尿病医療への貢献とともに CDE の看護実践能力のさらなる育成につながると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、糖尿病・予備軍のある人と地域における CDE との相互作用の場であるセルフヘルプグループ活動や市民公開講座などにおいて、先行研究で示唆された『糖尿病をもつ人のセルフケア自己評価を促す支援のガイドライン』(H25~H28 基盤 C 課題番号 25463413) を活用したセルフケア支援を行い、協働プログラムの有効性を明らかにすることである。

3. 研究の方法

『糖尿病・予備軍のある人と CDE との協働によるセルフケア power up プログラム』の企画、実施、評価を通して、セルフケア自己評価の支援について検討する。

分析方法については、プログラムの評価は、質問紙調査に対して統計学的手法および質的記述的手法 (カテゴリー化) を用いた。また、糖尿病・予備軍のある人と CDE との協働活動においては、プログラムでのグループディスカッションの記録や質問紙の自由記述、CDE と糖尿病をもつ人の相互作用については、質的統合法 (KJ 法) を用いた。

いずれも、参加者に趣旨を説明し、同意を得て実施した。

4. 研究成果

- (1) 『糖尿病・予備軍のある人と CDE との協働によるセルフケア power up プログラム』の実施状況

時期／企画	糖尿病・予備軍のある人
平成 30 (2018)年度	■対象：地域糖尿病療養指導士（CDEL）150名 研修会：「魅力的な友の会に するために」グループワーク
令和元 (2019)年度 令和 2 (2020)年度	■COVID-19 感染対策禍中のためプログラムの企画を変更：CDE・県・市 と協議の上、セルフケア power up の要素を含めたイベント ①世界糖尿病デー in 大分 2020 イベント企画・新聞掲載・友の会会員へパンフレット配布【新型コロナウイルス感染症の中で糖尿病とどう向き合うのか】 ②第 58 回日本糖尿病学会九州地方会 in 大分・市民公開講座企画・ケーブルテレビ放映・友の会会員へパンフレット配布【糖尿病をもつ女性・家族のライフサポート】 ③CDE 協働で友の会会員へパンフレット配布【生活習慣病と新型コロナウイルスとの付き合い方】 ④CDE 教育：第 58 回日本糖尿病学会九州地方会 in 大分・ワークショップ企画【糖尿病をもつ人のセルフケアの本質を探ろう～患者力を生かしたケアのために～】 ⑤CDE 教育：第 58 回日本糖尿病学会九州地方会 in 大分・九州 CDE ミーティング企画【九州 CDE パワーで好機に転換！糖尿病療養指導における COVID19 対策の現状と課題】 ⑥大分市保健所の生活習慣病対策推進協議会との連携プログラムでパンフレット作成・友の会会員へパンフレット配布 ■入院時にセルフケア能力測定ツールを用いた場面での糖尿病を持つ人と看護者の相互作用についてのデータ収集【2019 年～2021 年】
令和 3 (2021)年度	■対象：一般市民 16 名 公開講座：第 1 回「病を持っていてもいなくても “よりよく生きる” を目指した人生会議」（小グループ制）
令和 4 (2022)年度	■対象：大分市中小規模事業所 ①30 名 ②6 名 大分市保健所の生活習慣病対策推進協議会との連携プログラム： ①健康教育 Web 教室（健康教育動画 配信：閲覧期間・モデル事業所のみの限定）、②『病をもっていていなくても も生き生きと暮らすことについて』Zoom 座談会を開催 ■対象：一般市民 公開講座：第 2 回「病を持っていてもいなくても “よりよく生きる” を目指した人生会議」（小グループ制） ■入院時にセルフケア能力測定ツールを用いた場面での糖尿病を持つ人と看護者の相互作用についての研究をまとめた。（基盤 B 16H05575 と共同） ■糖尿病療養指導士のセルフケア支援能力の向上に向けて、大分 LCDE 認定研修会（事例検討会：Web 活用）を支援
令和 5 (2023)年度	■対象：大分県の減塩啓発活動「うま塩活動」を実施している A 市飲食店の就労者 20 名 公開講座：第 3 回「病を持っていてもいなくても “よりよく生きる” を目指した人生会議」（小グループ制） ■糖尿病療養指導士のセルフケア支援能力の向上に向けて、大分 LCDE 認定研修会（事例検討会：Web 活用）を支援 ■対象：CDEL ①14 名 ②10 名 ①「備えは万全？糖尿病患者さんの災害対策」 ②「糖尿病をもつ人と接する際の感情・態度・価値観について考えてみよう」
令和 6 (2024)年度	■対象：CDEL 「糖尿病を持つ方の日頃の災害対策について考えよう」 ■対象：CDEL 6 名 がんプロフェッショナル養成プラン活動と大分 LCDE 会とが協働 「病をもっていていなくてもその人らしく “生きる” を支える ACP」

(2) 研究成果

プログラムの方針として、成人期にある人については職域と連携して「仕事等で若い人の参加減少・アプリや Web 活用」に視点を当て、高齢者に対しては「興味を引く楽しい活動、糖尿病に限らない健康教室」に視点を当て、「患者・CDEL・友の会・施設間の横のつながり不足」を解消しつつ、「県や市や大学や福祉と協働」したプログラムを検討した。プログラムを通して、ACP のように、人々の価値観・判断に基づいて将来を考える自己決定のプロセスは、互いの自己評価を深める営みとして応用できることが示唆された。また、CDE は多様な人々の価値観・判断に寄り添うためにも、専門職としての知識や感性のブラッシュアップ、セルフケア power up には対話などの相互作用の場や機会の設定が重要である。

①【2018年度の成果】

友の会の発展課題と魅力的な活動のための検討 ～グループワーク記録の解析～

【結果】「友の会発展の課題」については、302コード、17カテゴリーが抽出された。その内容は、患者会員の減少や高齢化、医師やCDELのマンパワー不足・業務外での負担、仕事等で若い人の参加減少、経済的負担と制約、アピール不足、ニーズにあっていない、患者・CDEL・友の会・施設間の横のつながり不足、継続できにくいシステム不備、会員の特典がない、冊子の活用状況、糖尿病への偏見などがあつた。

「魅力的な活動」については、482コード、20カテゴリーが抽出された。その内容は、アプリやWeb活用、興味を引く楽しい活動、糖尿病に限らない健康教室、個別性・地域特性・社会の動向に対応した活動の対象・内容・方法、さかえの改革と患者会費の検討、糖尿病を気負わずに支え合いリラックスできる企画、県や市や大学や福祉と協働、糖尿病包括連携、登録制や診療報酬加算など病院診療や制度システムの中に組み込むなどがあつた。

【考察】友の会はメンバー共生で仲間とともに生きていくセルフヘルプグループである。糖尿病とうまく付き合うためには一人ではなく家族や医療者や友人などと交流の幅を広げ話し合うことが大切である。そのためにはメンバーの主体性・対等性・ニーズに合った方法・組織化しすぎずに同じ志を持った仲間が気軽に集まることが、協働プログラム企画の方向性の重要なカギとなることが示唆された。

②【2019・2020年度の成果】

COVID-19感染対策禍中のためプログラムの企画を変更し、CDE・県・市と協議の上、社会情勢に対応したセルフケアpower upの要素を含めたイベントを実施した。喫緊の課題でもあり、「大分県LCDEの新型コロナウイルス禍の影響と対策」「九州CDEパワーで乗り切ろう 糖尿病医療におけるCOVID19対策の現状と課題」「九州CDEミーティング in 大分 事前調査」「糖尿病手帳を仕事と治療の両立するために活用するメリットとデメリット」について、学会発表を通して活動報告を行った。

③【2021年度の成果】

「病を持っていてもいなくても“よりよく生きる”を目指した人生会議」の意義

【目的】アドバンス・ケア・プランニング（以下、ACP）に関する市民公開講座での参加者同士の語り合いを通して、「病を持っていてもいなくても“よりよく生きる”を目指した人生会議」の意義を明らかにする。

【結果】60のラベルよりグループ編成を5回行い、7つのシンボルマークを抽出した。参加者同士の語り合いを通じた人生会議の意義として、[必要性の実感と関心の高まり：人生会議の経験による困難さの緩和]の結果、[日常的に：自分の時間や家族と希望を伝え合う環境の確保]と[機会をみつけて：いつでも信頼できる誰とでも]と両面で気づいていた。これらは、[意思の経時的な書面化：意思決定の痕跡を残す]や[自己での意思決定の継続：自分の人生にとって有意義な選択]という両側面の基盤となっており、相乗効果となっていた。これらに支えられ、[人生の見つめなおしの機会：他者との対話から自分や家族の将来に目を向ける]ことに繋がり、その結果[人生の紡ぎ合い：信頼できる人と価値のおくことに関する相互理解]となった。

【考察】健康な人に対するACPは、まずは知ってもらうことが目的とされるが、本結果では年齢や病気の有無に関わらず講座での経験を通して知る以上の成果が見られた。ACPという言葉の正しい意味を知って実際に経験することで、印象的に捉えられていた困難さが緩和され、[日常的に][機会をみつけて]のようにACPの場やタイミングといった基盤づくりや、[自己での意思決定の継続][経時的な書面化]のようにACPに取り組む上での重要な視点を理解することができていた。その結果、[人生の見つめなおしの機会][人生の紡ぎ合い]のように人生における価値、つまり人生会議の意義を見出すことに繋がった。

④【2022年度の成果】

健康教育Web教室では、“生活習慣病（メタボや糖尿病・高血圧など）予防と治療（医師）”、“よりよい健康に向けた食事（LCDE 栄養士）”、“よりよい健康に向けた運動・活動（LCDE 理学療法士）”、“服薬管理について・お薬手帳（専門部会委員 薬剤師）”、“歯の健康について・糖尿病や循環器の手帳（専門部会委員 歯科医師）”のコンテンツで各10～20分で、大分糖尿病療養指導士、生活習慣病対策推進協議会委員、糖尿病専門医など多職種の協力により作成し、Web配信した。Zoom座談会では、A事業所の健康課題のある人や希望者6名を対象に、健康診断の結果を踏まえて、人生会議を実施した。いずれも、就労時間内での活動の希望があり、セルフケアのpower upには時間確保も重要であることが分かった。しかし、限られた時間においても、自分の健康を振り返るチャンスがあることは意義があるとの評価が得られた。

糖尿病セルフケア能力測定ツールを活用したセルフケア支援での入院時と退院時における患者一看護師間の相互作用の探究

【目的】糖尿病セルフケア能力測定ツール（IDSCA）を活用したセルフケア支援での入院時と退院時における患者一看護師間の相互作用を探究することである。

【結果】入院時は【表層的な合意】と【セルフケア状況の振り返り】が基盤となり、差異の探究と【後押ししながらの共有】が影響し【自己客観視の始まり】となった。その結果、【支援に向けた看護師の心持ちの表明】と【患者の決意表明】となっていた。退院時は【評価の共有】と【状況の共有】が基盤となり、【対話での気づき】と【両者で許容】と【共に熟考】が相まって、【今後へ向けた協働】となっていた。

【考察】患者―看護師間の相互作用は、入院時は“共有”から“応答”へ発展し、退院時は“共有”が基盤となって“応答”、“安定”へ発展した。入院時、退院時ともに、両者は相互作用の深まりの中で成長を認めたため、IDSCA の活用の意義が示唆された。

⑤ 【2023・2024 年度の成果】

減塩啓発活動に努める就労者における人生会議の有用性

【目的】大分県では、生活習慣病の発症・重症化予防に向け、2014 年より無理なく減塩できる食環境の整備を目指した「うま塩プロジェクト」が普及され、各地域において地方自治体と飲食店を経営する人々が協力し取り組んでいる。しかし、COVID-19 感染症拡大に伴い、おうえん企業の就労がままならず、うま塩活動の普及が停滞した地域も見られた。そこで、地域社会との連携と共存を図り、うま塩活動に取り組む飲食店の就労者を対象に、“よりよく生きる”を目指した人生会議（ACP）を実施したので、その有用性について報告する。

【結果】参加者 20～60 歳代 20 人。参加者全員が、講座に満足し、自分や家族の生活・人生・健康を考える機会となり、人生会議を続ける意思を示していた。また、「話し合いを持つ」ことについて、参加前「とても（5 人・25%）・まあまあ（10 人・50%）思う」15 人（75%）が参加後には全員が「とても（16 人・80%）・まあまあ（4 人・20%）思う」と回答した。自由記述では、[うま塩活動の普及への希望]（9 件）、[うま塩弁当の魅力の発見]（7 件）、[うま塩活動のやりがいの共有]（6 件）、[人生会議への意欲の始まり]（4 件）、[健康への関心の高まり]（4 件）が見られた。

【考察】市民と医療保健専門職が共に減塩食を堪能し、人生について対話することにより、健康と就労のライフワークバランスについて考える機会となり、両側面の意欲も高まり、家族など周囲と対話を継続する意思の芽生えから、人生会議の重要性が示唆された。

「備えは万全？糖尿病患者さんの災害対策」研修会の実践報告

【目的】近年、災害が増え、「糖尿病医療支援 チーム」（DiaMAT）の創設が推進されている。大分県糖尿病協会・大分 LCDE 会でも災害支援の取り組みやシステムを構築する必要がある。そのため、大分 LCDE で災害支援への取り組みのきっかけとなるように研修会を実施・評価したので報告する。

【結果】参加者 14 名で、全員から回答を得た。参加の動機は、災害への関心が 11 件と最も多かった。13 名（92.8%）が研修会に満足していた。自施設での災害への取り組みを実施している所は 6 名（42.8%）、患者への災害教育を実施している所 3 名（21.4%）であった。有効性として、他施設の活動から学ぶ自施設の課題が見えた（3 件）、患者のセルフケア（自助）促進とその支援の重要性を考える機会となった（4 件）と、全員が役立ったと回答した。今後の取組については「自施設での個人指導、糖尿病教室、スタッフにも伝えたい・いずれくる災害に備えて地域の方の支援をしたい」等と全員が実施したいと回答した。大分 LCDE 会への要望は、研修会の継続・拡大による大分 LCDE への災害認知の浸透（4 件）、ネットワーク・システムの整備（3 件）、資材や情報の共有の場の設置（5 件）であった。

【考察】ミニ講義で知識や情報を拡大し、グループワークで他施設や多職種の状況を共有することで、災害対策への再認識と迅速な対応の必要性などの気づきとなった。今後、LCDE 研修会はもちろん教室や友の会での災害対策支援が課題である。

研修会「糖尿病をもつ人と接する際の感情・態度・価値観について考えてみよう」の評価

【目的】医療従事者同士が糖尿病を持つ人のスティグマについて考え共有すること、個人に存在する無意識のバイアスを理解することをねらいに研修会を実施し、評価する。

【結果】回答者は 10 名で、看護師 5 名、栄養士 3 名、薬剤師 2 名だった。研修会について、全員が良い雰囲気と答え、理由は、「少人数なので全員で話ができる：8 件」「自分の考えも相手の考えも出しやすく意見交換しやすい：5 件」等だった。スティグマに繋がる感情・態度・価値観の理解について、全員が深まったと答え、理由は、「無意識のうちに患者というレッテルを貼っていることに気づいた：6 件」「自分の思考を振り返りスティグマや無意識のバイアスについての考え方・伝え方などのポイントを理解した：5 件」等だった。患者への対応について、9 名が変化しそうと答え、理由は、「難しいが、他の患者・他のスタッフにもスティグマについての学びを活かして実践していきたい：4 件」「先入観やステレオタイプで判断しないように、患者に何が起きているのか一呼吸おいて考えて接したいと思う：3 件」等だった。

【考察】研修会を通して、無意識のバイアスやスティグマについて考え、多様な視点を得ながら思考を整理する機会となり、実践への意欲が高まった。ワールド・カフェ方式が対話を促進し、深い内省を促したと考える。今後も研修会を継続し、多くの CDEL で共有することで、スティグマのない支援の実現が期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 式田 由美子, 大末 美代子, 大野 夏稀, 脇 幸子, 清水 安子	4. 巻 28
2. 論文標題 糖尿病セルフケア能力測定ツールを活用したセルフケア支援での入院時と退院時における患者 - 看護師間の相互作用の探究	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本糖尿病教育・看護学会誌	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24616/jaden.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 脇幸子、佐藤昂太郎、大野夏稀、末弘理恵、式田由美子、大柱智恵美、加隈哲也
2. 発表標題 減塩啓発活動に努める就労者における人生会議の有用性
3. 学会等名 第11回日本糖尿病協会学術集会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大垣香菜, 諫山瞳, 尾家亜紀, 北迫千賀子, 倉原 千春, 西本 裕子, 浜野 峰子, 脇 幸子
2. 発表標題 「備えは万全? 糖尿病患者さんの災害対策」研修会の実践報告
3. 学会等名 第11回日本糖尿病協会学術集会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 脇 幸子
2. 発表標題 糖尿病をもつ人のセルフケア能力を支える看護～持てる力を共にpower up～
3. 学会等名 第60回日本糖尿病学会九州地方会 糖尿病ケアのSDGs ～豊かな健康長寿を目指して～ ワークショップ「考えよう 病院での糖尿病ケア力の向上」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 北迫千賀子、脇 幸子、大野 夏稀、岡本 光弘、田中 克宏、伊東 康子
2. 発表標題 療養指導士認定研修会におけるZoomを用いた事例検討会の成果と課題
3. 学会等名 第9回 日本糖尿病協会年次学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 式田由美子、大末美代子、大野夏稀、脇幸子、清水安子
2. 発表標題 糖尿病セルフケア能力測定ツールを活用した療養支援での患者 - 看護師間の相互作用の検討 - 入院時と退院時の比較 -
3. 学会等名 第27回 日本糖尿病教育・看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 脇幸子、廣田優子
2. 発表標題 新型コロナウイルスだからこそオンライン研修を通して見えてくるCDELの認識
3. 学会等名 第8回日本糖尿病協会療養指導学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大野 夏稀、脇 幸子、森元 竜太郎、佐藤 祐貴子
2. 発表標題 「病を持っていてもいなくても “よりよく生きる” を目指した人生会議」 の意義
3. 学会等名 日本看護研究学会九州沖縄地方会第26回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 脇幸子 田中克宏 伊東康子 式田由美子 大末美代子 北迫千賀子 柴田洋孝
2. 発表標題 大分県LCDEの新型コロナウイルス禍の影響と対策
3. 学会等名 第58回日本糖尿病学会九州地方会 一般演題
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 脇幸子、田中克宏、仲地 健、式田由美子、大末美代子、北迫千賀子、山川 房江、仲里幸康、糸数ちえみ
2. 発表標題 九州CDE パワーで 乗り切ろう 糖尿病医療における COVID19 対策の現状と課題 九州 CDE ミーティング in 大分 事前調査
3. 学会等名 第58回日本糖尿病学会九州地方会 九州 CDE ミーティング in 大分
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高倉由樹子 脇幸子
2. 発表標題 糖尿病手帳を仕事と治療の両立するために活用するメリットとデメリット
3. 学会等名 第58回日本糖尿病学会九州地方会 一般演題
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 脇幸子
2. 発表標題 友の会の発展課題と魅力的な活動のための検討 ～グループワーク記録の解析～
3. 学会等名 第7回 日本糖尿病療養指導学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大柱智恵美、脇幸子、大野夏稀、佐藤昂太郎
2. 発表標題 研修会「糖尿病をもつ人と接する際の感情・態度・価値観について考えてみよう」の評価
3. 学会等名 第12回 日本糖尿病療養指導学術集会
4. 発表年 2025年

1. 発表者名 尾家亜紀、西本裕子、浜野峰子、諫山瞳、脇幸子
2. 発表標題 「糖尿病を持つ方の日頃の災害対策について考えよう」研修会の実践報告
3. 学会等名 第12回 日本糖尿病療養指導学術集会
4. 発表年 2025年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	清水 安子 (Shimizu Yasuko) (50252705)	大阪大学・大学院医学系研究科・教授 (14401)	
研究分担者	濱口 和之 (Hamaguchi kazuyuki) (60180931)	大分大学・医学部・客員研究員 (17501)	
研究分担者	瀬戸 奈津子 (Seto Natsuko) (60512069)	関西医科大学・看護学部・教授 (34417)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大野 夏稀 (Ono Natsuki) (20818596)	大分大学・医学部・助教 (17501)	
研究分担者	佐藤 昂太郎 (Satou Koutarou) (70963247)	大分大学・医学部・助手 (17501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関